

シノペのディオゲネスの前半生 ——キュニコス派哲学の成立背景をめぐる考察

長尾 柊輝

シノペのディオゲネス（＝D）が〈犬〉（*kuon*）の生を選んだのは、「祖国からの追放」という危機に際しての劇的な回心・開悟体験のみによるものではない。むしろ彼の哲学は、その前半生において既にかんりの程度方向づけられていた。——これが本稿の中心的な仮説である。このような仮説を提示することによって本稿は、Dierotの先駆的な洞察（1751: 509）にひとつの裏付けを与えるものとなりうるだろう。彼曰く「ひととは、アカデマイア派や折衷派、キュレネ派、ピュロン主義、懐疑論の徒となった。しかるにキュニコス派の徒としては、そのように生まれ付かねばならなかったのである」（傍点引用者）。

従来のD研究は、彼の追放（あるいは亡命）の契機となった通貨鑿刻事件（後述）や追放後の哲学実践ばかりに言及し、彼の前半生に対しては十分な注意を向けてこなかった。その主原因といえるのが、資料の乏しさもさることながら、Dの哲学思想を前半生の市民生活と鋭く対比させ、両者間の断絶を決定的なものとして捉えようとする古来の先入観¹である。本稿はこうした通説とは異なる解釈を提案することで、キュニシズムという奇怪な思想が生成してきた背景を、従来よりもいくらか理解しやすいものとすることを目指す。

ともあれ、以上の仮説を導くために本稿は、Dの前半生に関する伝記的な事実を検討する。はじめに第一節で

は、この問題に取り組むうえで最重要の資料といえる『哲学者列伝』（＝Diog. Laert.）の一節を引きながら、Dの前半生をめぐる全体的な見通しを素描する。次に第二節では「シノペ」という生地、第三節ではトラペジテス（τραπεζίτης。銀行家／両替商²）という生家の家業をそれぞれ考察し、Dが通貨鑿刻事件以前の段階ですでに周縁的・脱慣習的な観点に立ちえていた可能性を指摘する。最後に第四節では、Dの前半生を後半生から切断する根拠とされてきた種々の証言を検討し、それらと本稿の仮説とが充分整合的な仕方では理解されうることを示す。そのうえで論文末尾には、本稿の主題と関わる三つの補論（「Dの生没年」「初期キュニコス派一般への拡張」「アンティステネス問題」）を付した。

第一節 基本証言の確認

アテナイでの〈犬〉的生活に先立つDの前半生については、Diog. Laert.における以下の報告が最も充実した情報を伝えている。

Dは銀行家／両替商（τραπεζίτης）ヒケシオス³の息でシノペの人。なおディオクレス⁴曰く、彼の父は公金を扱っていたが、通貨に鑿刻した（ταραχάσας τὸ νόμισμα）ため、彼「D」は亡命した。他方エウブリデス⁵は、『Dについて』のなかで、D当人がそれを為し、父とともに放浪したのだと言っている。しかのみならず彼「D」自身も、『ポルダロス』⁶のなかで、通貨に鑿刻した旨を自叙している。また別伝では、「Dが」監督官であったさい、職人たちに説き動かされ、デルフォイ（あるいは彼の祖国にあるアポロン⁷の聖所）に赴いたのち、まさに説き動かされた当のことを為したものでどうか、アポロン神に

伺いを立てた。そこで「神は、」ポリスの慣習（*πολιτικὸν νόμιμα*）「の鑿刻」を許したのだが、「Dは」そうと解さず、貨幣に混ぜ物を加え品質を下げた（*κεῖσθαι*）のである。事が露見したさい、一伝では、彼が追放されたといい、別伝では、恐れて自ら逐電したという。さらに別伝では、彼が父から引き取ったのちに、通貨を毀損した（*διαθεῖναι*）のだという。[そのさい]一方「父」も捕縛され、死んでしまったが、他方「D」は亡命し、デルフォイへと赴いた。そしてそこで、鑿刻したものかどうかではなく、何が最高の名声をもたらすかという伺いを立て、その結果、以上の神託を受け取ったのだという（*Diog. Laert. VI 20-1 = SSR VB2*）。

証言の大半を占めるのは、通貨鑿刻事件をめぐる諸伝承の列挙である。かつてこの事件は研究者たちのあいだで史実性を疑われ、D自身ないし後世人たちによる半ば比喩的な創話であると見なされてきた。しかしながら、一九三〇年代に *Selman* が発表したシノペ出土の考古学資料と、それを踏まえた *Dudley* の論稿（1937: 21ff）は、一連の伝承が最低限の史実に基づくものであったことを「実証」した。¹⁰ こうでいう「考古学資料」とは「*IKESZ* [O] および *ΔΙΟ* という鑄造責任者名が刻印された鑿刻痕つきのコイン群を指す。Bogaert（1968: 227）や山川（2007: 84-92）が指摘するとおり、彼らの議論には一定の瑕疵が含まれてもいるが、いずれにしたところで、通貨鑿刻事件の史実性自体はほとんど疑う理由がない。そして、事件そのものが史実を反映している以上、トラペジテスというDの家業についても、*Dudley* 以前に見られたような懐疑論を差し挟む必要はないということになる。

なお、事件の具体的な詳細をめぐる錯綜した伝承は、これまで、事件の再構成をめざす論者たちの頭痛の種となってきた。しかし本稿は、この問題に深く踏み込まない。¹¹ なぜとって、本稿の主題はあくまでも事件以前の前半生だからである。われわれとしては、Dがシノペ出身者であり、トラペジテスの家に生まれ育ったのだと

いう二つの点を確認できればそれでよい。そして、これら二点にかぎっていえば、難儀な解釈問題が生じてくる恐れもないのである。

とはいえもちろん、以上の利点は、情報の絶望的な少なさとトレードオフの関係にある。ともするとわれわれは、Dの前半生およびその思想形成上の意義について、ほとんど何も語る術を持たないのではないか。——この疑惑に対する本稿の答えは、しかし、言うまでもなく否である。われわれは、事柄の性質上仮説的な水準にとどまるとはいえ、上述のわずかな情報だけでも十分豊かで魅力的な示唆を得ることができる。そしてその示唆は、Dの思想形成を考えるうえで非常に重要な意味を持つものとなるはずである。

第二節 シノペ

シノペはイオニアの有力市ミレトスが黒海（ポントス）沿岸に建設した最古の植民市で、「黒海を縦断する最短航路を統制する戦略上重要な位置を占めていた」（篠崎 2013: 220）。当市の繁栄はとりわけヘレニズム期以降に絶頂へ達したが、その背景をなす資源豊かな植民市の建設・確保¹²は、言うまでもなく古典期以前の隆盛を示唆するものである。

とはいえ、シノペという繁栄した商業都市には、覆いがたい辺境性が刻印されている。かかる辺境性は、そこで暮らす者の内面に「自立した、勇敢で、飾らない、シニカルな」気性（Robinson 1906: 258）を育むものであるとともに、卑屈な劣等意識を醸成するものでもあった。以下に引くヘロドトスの一節は、古典期のギリシア人たちが黒海地方の諸都市に対して向けていた偏見を象徴的に示す資料である。

ダレイオスが遠征を企図していた黒海は、スキュタイ人を除いては世界中で最も無知蒙昧な民族を擁する地域である。黒海の内側に住む民族の中でスキュタイ人とアナカルシスを除いては、知能が優れているとしてその名を挙げるに足る民族は一つもなく、また一人としてこの地方出身の知識人のあるのをわれわれは知らぬのである」(Hdt. IV 46; 松平千秋訳)。

Braundが指摘するとおり、「黒海(あるいはその一部)の「ギリシア性」はより包括的な立場からは受け入れられていたが、この地域をギリシア世界の外部にあるものとして除外しようとする傾向もまた色濃く存在した」(1997: 121)。このような状況を受けて、黒海地方の側にもギリシア本土との繋がりを何とか確保しようとする動きがあったらしい。黒海の人々はしばしばアテナイやイオニアに留学し、自分たちの「ヘラス的アイデンティティ」を追求した。しかしそれでも、黒海地方に対するギリシア人の両義的眼差しは残りつつける。Braundの逆説的表現によると、「黒海地方の諸都市はギリシア的であつたかもしれないが、十分にギリシア的ではなかった」(133)。「バルバロイの只中で暮らし」¹³「もはや明瞭なギリシア語を話さなう」(Dio Chrys. Or. XXXVI 9)境界的な存在としての黒海人。こうした境界性は、シノペの建国神話とも密着している。Braundの再構成によると、シノペはアマゾン族とのあいだに深い結びつきを有していた(2010: 15ff)。

上述の一般的表象は、Dの心性にも色濃く反映していた見込みが高い。プルタルコスが伝える次のような逸話は、Dがシノペを劣等な土地だと見なしていたことを前提する。

それゆえ〈犬〉のDも、「シノペ人たちは君に黒海からの追放を宣告したのだ」と言ってきた者に対し、こう答えた。「しかし俺としても、奴らに黒海に留まるよう宣告してやったのだ。——客も寄りつかぬ海峡の

波頭にね¹⁴] (*De exil.* VII 602a = SSR VB11)。

これと同様のトポスは、擬Dの第一書簡 (SSR VB531) にも見出される。

お前たち「シノペ人」が俺「D」に「追放」の有罪票を投じた一方で、俺もお前たちに「滞留」の有罪票を投じてやったのだ。その結果、お前たちはシノペ、俺はアテナイに住まっている。別の言い方をすれば、お前たちが商人連中と共生しているのに対し、俺はソロンや、ギリシアをメディア人どもから解放した人々と一緒に暮らしている。また、お前たちは「…」全ギリシアと敵対する種族の出身者と取引しているが、俺は神々の同胞たるデルフォイ人やエリス人たちと付き合っている。「…」俺が恐れているのは次のこと、つまり、祖国に関する世間公共の言説 (*κοινὸς λόγος*) が、俺を害しはしないかということなのだ。

これらの諸伝承を脇に置くとしても、Dがシノペという都市の辺境性を深く自覚していた可能性は高い。彼はシノペから出る前にもアテナイに一時滞在していた見込みがあり¹⁵、しかもまた、叙事詩や悲劇、哲学といったギリシア的教養に十分通じていた¹⁶。そもそもキュニシズムという思潮自体、多くの点で濃厚にギリシア的な現象である (e.g. Desmond 2006)。それゆえにこそかえって、彼は祖国の覆いがたい周縁性とそれを見る本土人たちの眼差しを痛切に意識せざるをえなかったのではないか。

とはいえ以上の点をめぐっては、Dのルーツがアテナイ人入植者にあるとする山川の見解 (2007: 79-81) に触れておかなければならない。そのためにはまず、前五世紀後半にペリクレスの主導で行われたアテナイの黒海政策について理解する必要がある。これについては、篠崎がロシア語圏での研究にも目配りしながら詳細に整理

している (2013: 211ff; also cf. Braund 2005)。ペリクレスの黒海遠征に関する明確な叙述はトゥキュディデスには見られず、プルタルコス (*Vita Per.* XX 1-2) にのみ確認される。それによるとペリクレスは、大艦隊を率いて黒海に侵入し、シノペの僭主を亡命へと追い込んだのち、アテナイ人六〇〇名を当地に入植させたのだという。プルタルコスの記述の史実性をめぐっては、否定派、部分的修正派（遠征の射程を黒海南岸のみに限定する）、肯定派の三派が存在している。このうち第一の極端な立場は、並行資料の不在という「沈黙の論証」に多くを負うが、トゥキュディデスがしばしばペロポネソス戦争に直結しない重大事件を省略しているという点を鑑みれば、説得力を欠くと言わざるをえない。そのため、いずれにしてもシノペへの遠征自体は史実として認められるべきであろう。その年代については、確証を欠くものの、前四三七年とするのが多数説のようである。

しかしながら、アテナイ人入植者たちはその後、シノペにあまり根付かなかった蓋然性が高い。クセノフォンはアジア遠征からの帰路でシノペを経由している（前四〇〇年）が、その間の事情について記した『アナバシス』のなかで、シノペ人が「ミレトス人の移民である」（VII 115）とだけ述べている。すなわち裏を返せば、ペリクレスが遠征後に送り込んだはずのアテナイ人入植者には一切言及していない。スパルタはアイゴスポタモイの戦いのあと、ピュザンティオンやカルケドンなどから在地のアテナイ人たちを祖国へ強制送還する戦略をとった（前四〇五年；Xen. *Hell.* II 2.2）が、そのさいシノペのアテナイ人入植者も放逐された可能性がある（篠崎 2013: 220; Rouineau 2023: 11）。Braund は「クセノフォンの沈黙がおそらく「アテナイ人入植者の「原住シノペ人への」統合ないし不在」を意味するとしており、実際の論調としては後者のオプシオン（つまり「不在」）に傾いている」（2005: 201, n. 10）。篠崎が指摘するとおり、「三十年ほどの短い期間の、しかも限られた数のアテナイ人入植者の存在は、シノペの伝統に大きな影響を及ぼすことはなかったのであり、クセノフォンがシノペをミレトス人の植民市と呼んだのは当然のことであった」（2013: 220-1）。なお、Dの生年は前五世紀の末ごろだと考えられ

る。¹⁷ クセノフォンのシノペ来訪時、Dはおそらくすでに誕生していた。

ともあれ以上の点から、Dがアテナイ人入植者の子孫であったとする山川の行論が説得力をもたないことは明らかである。山川はDの父が「造幣局長官」（トラペジテスの言い換え）であったという点から、その出自をペリクレスの送り込んだアテナイ人植民に由来するものとはほぼ断定的に推測する。山川曰く、当時のシノペを「牛耳っていた」アテナイ人が、「自分たちの利益を損ないかねないミレトス人や現地人に、造幣局長官のような重要な役職を委ねたとは考えにくい」（2007: 79）。とはいえ、政体変化の記録が見当たらないからアテナイ支配が続いていたはずだ（79-80）というのは論拠として不十分である。当時のシノペ史を再構成しようとするさいに必ず言及される資料の著しい欠乏は、そうした不在からの論証を正当化しない。彼が亡命以前にアテナイに来訪していた形跡がある点（80-1）についても、上述のとおり、黒海地方の人々のギリシア本土志向（あるいはコンプレックスと言ってもよい）によって容易に説明できる。したがってDは、自らの「ギリシア的正統性」を少なくとも血筋のうえからは強く確信できない境遇にあった、と考えるのが自然だろう。

第三節 トラペジテス

Dの父は *δημόσια τράπεζα* (lit. public table) を管掌していたという。Diog. Laert. VI 20ff はこのトラペジテスの業務内容が通貨の品質管理にもわたっていたことを示す。¹⁸ また、Selmanらによる考古学的証拠を勘案すると、トラペジテスの仕事は通貨の鑄造そのものに関わっていた見込みが高い。¹⁹ そのためこれを、アテナイにおけるいわゆる「銀行家／両替商」の業務とどの程度重ねて見てよいのかは不明である。金貸しや両替が平時の業務で臨時に鑄銭を行っていたのか、それとも、ここでいうトラペジテスは前者の業務とは無縁の純然た

る鑄錢管理者だったのか。場合によっては、「両替商」という半ば定着した在来訳は一種の誤訳だと言えるかもしれない。LSJ (s. v. τραπεζίτης) はこの語に money-changer & banker と並んで director of a state-bank という語釈を与えており、Montanari (2015: s. v. τραπεζίτης) や Bogaert (1968: 226) もそれに倣っている。とはいえ実際には、シノペの国制を示す資料の著しい欠損ゆえ、少なくとも管見の及ぶ範囲では、「かもしれない」という以上のことは何も言えない。

Selman の発表要旨では、キャピタライズされた Banker or Treasurer of the State という訳語が「伝統」に帰されており、トラペジテスを明らかに公職者として解している (s. n. 1930: 7)。この理解はおそらく妥当であろう。しかしここで注意すべきは、仮に公職者であったとしても、その地位が父子間で世襲されるものであったという点である。われわれは、抽籤ないし選挙を原則としたアテナイの公職と同様のイメージを抱くべきではない。文献資料や考古学的証拠を勘案するかぎり、D は父からトラペジテスの仕事を相続した。彼は、「普通の市民」として生まれ後からトラペジテスに選任されたのではなく、代々それを生業とする家に生まれついたのである。

鑄錢管理者としてのトラペジテスの社会的地位は定かでない。²⁰ 銀行業者としてのトラペジテスに関しては、ギリシア世界においてしばしば蔑視や敵視の対象となった商業と密接に結びつき、従事者の多くが奴隷出身であったことが知られる。²² とはいえ、そもそもトラペジテスの内実が異なっている以上、D がどうであったかは不明である。エピクテトスが明らかにDの親を非自由人と解していること (Art. Epict. diss. IV 1, 152 = SSR VB293) や、Dが「低い生まれゆえに」誹謗されたとする逸話がアラビア語の資料に残っていること²³ もあって、銀行業と奴隷とのイメージ連関は、Dの血統をめぐるさまざまな空想を喚起しうる。とはいえ、シノペ出土のコインに父ヒケシオスとDの名前が刻印されているという事実は、彼の出自的賤しさをめぐる空想が単なる空想にすぎないことを示唆しているように見える。ポリスの象徴であるコインに、たとえば鑄造者であったとしても、奴

隷出身者（およびその係累）の名前が刻まれたであろうか。ともあれ、この問題をめぐってはこれ以上仮説を展べ広げることができない。

ここでは、鑄錢管理者の社会的地位よりもむしろ、貨幣それ自体がもつ特別な含意について、やや踏み込んだ解釈を展開してみよう。貨幣というものはその根底において規約的である。Scaford曰く、「[...] 初期の硬貨に打刻された印は、品質の証でもなければ重量の証でもない。それはむしろ、兌換可能性 (redemability)」、すなわち、政治的（あるいは社会的）に与えられた価値の証であった。²⁴ 硬貨が受け容れられるのは、単なる内在的価値のみならず、（喪失しないかぎりは自由に使用できるという）信用によってでもある」（2004: 136）。そもそも「ノミスマ」という語自体、その慣習依存性を如実に指標したものにほかならない。アリストテレス曰く、「通貨は協約によつて (κατὰ συνθήκην) 必要のいわば代替物となった。そしてこのために、「ノミスマ」という名前を持つのである。というのもそれは、自然本性ではなく法慣習によるものであって (ὁ νόμος ἀλλὰ νόμος)」、これを変更するのも、使用できないものとするのもわれわれ次第なのだから」(Eth. Nic. V 5, 1133a28-31)。そしてDは、この通貨を自らの監督下で鑄造し、そこに自らの名前を刻印するという稀有な体験をしており、しかもその体験を生まれたところから宿命づけられていた。彼は職人に貨幣の打刻作業を行なわせたのち、当の貨幣を彼らへの給与として支払っていただろう。このとき彼は否応なく、ノミスマひいてはノモスの人工性・恣意性を体感せざるをえない。奇しくもアテナイオスの証言によれば、「Dは自身の著作『ポリテイア』のなかで、骰子 (ἀστρογάλαον) が通貨であるという法を定めてゐる (νομοθετεῖ)」たのだという (Ath. IV 159 = SSR VBI25)。²⁵

加えて通貨は、あらゆるものに普遍的に適用されうるという特異な性格を有している。アリストテレスの整理によれば、通貨という制度の根源にあるのは、「すべてのものが何かひとつのものによつて測られねばなら

なら」(*Eth. Nic.* V 5, 1133a25-6) とういう要請である。この要請が満たされないかぎり、交換的正義は成り立たず、協同関係 (*κοινωνία*) も持続しえない。

すべてのものには値がつけられなければならない。というのも、交換はいつもそのようなものとしてあり、そうであればこそ、協同関係も成り立つのだから。かくして通貨は、あたかも尺度 (*μετρητής*) のように、「諸々のものを」通約的なもの (*συνμετρεῖν*) とすること、[それらを] 等しくする (*ἰσάζειν*)。なぜといって、交換がなければ協同関係もなく、平等性がなければ交換もなく、通約性がなければ平等性もなかったであろうから (1133b14-8)。

通貨は具体的な事物が本来有していたはずの質的固有性を普遍的・通約的な量的指標へと変換する。その結果、それまでは困難だった異なるもの同士の価値の比較と過不足のない平等な交換とが可能になる。ここでアリストテレスが述べる「平等性」とは、交換されるもの同士のあいだでの正確な「等価性」のことを指す。

とはいえ通貨は、「非階級性」という意味での「平等性」とも深いかわりをもっている。この点については、たとえば Künke の説明が啓発的である。「硬貨 (coinage)」は、貴族階級その他の安定したヒエラルキー——そのもとは貴族階級が貴金属や他の高級品に関する占有権を主張する——に対し、巨大な脅威を示すものである。硬貨の導入とともに、「相手を考慮しない」無差別な分配や、見知らぬ者同士での交換が行われる余地が生じるようになった。このことは、贈与交換的な文化のもとして作用する序列化された物々交換の領域を転覆させてしまふ」(1995: 42; also cf. Seaford 2004: ch. 2-3, 8)。古代ギリシアにおいて一般的だった「貨幣」と「僭主」のイメージ連関 (von Reden 1997: 168ff) は、この面と無縁ではなかったであろう。貨幣は何もの(者/物)とのあいだ

にも固有の関係を築かない。貨幣は或る人から別の人へと次々に渡り歩いてゆき、ほとんど一切の事物と交換可能な存在²⁶として、(貨幣経済の及ぶかぎり)どこまでも漂泊していくことができる。²⁷貨幣交換は確かに一種の「協同関係」(アリステテレス)を成立させるものであるが、それは Simmel の示唆するとおり、無色透明でいわばアトム化された、代替可能な相手との関係である(1930: 297ff [1999: 301ff])。プラトンが警戒し(Skulety 2006) Simmel が両義的な眼差しを向けた(1930: 377ff [1999: 378ff]) 貨幣の「個人主義」が、ここに頭をもたげてくる。奴隷出身者や下層市民が銀行業や海上交易での成功によって巨万の富を築くことができるようになった時代、通貨は取引の相手を選ばぬ「平等性」によって、古来の階級秩序を深刻に動揺させる力を持ちえた。なお、以上に見た貨幣の普遍性(あらゆるものを通約する)、抽象性(関わる人や物の固有性を無視する)、移動性(特定の場所にとどまらない)は、Simmel が異人／よそ者(der Fremde)に与えたのと同じ特徴である(1908: 686-8 [1994: 286-8] ; 1930: 220ff [1999: 225ff])。Simmel 社会学の体系において、貨幣と異人は密接に関わり合う。このことから直ちに鑄錢管理者の異人性を引き出すことは難しいが、それでも、通貨という存在^{ノミスマ}自体が在来^ミの慣習・秩序^ヲを相対化しうるものであったという逆説は見過ごされるべきでないように思われる。²⁸「ノミスマを鰌刻する(παράχαρττειν το νόμισμα)」という繰り返し引用されてきた標語の含意は、この点を踏まえることによって初めて真に理解されうるだろう。キュニコス派の実践において、ノミスマはあくまでも παράχαρττειν されるのであって、放棄されたり無化されたりするわけではない。生まれた時点から貨幣と深いつながりを有していたDは、生地^{ノミスマ}の辺境性にかんする覆いがたい劣等意識を抱く一方で、周縁／中心図式を規定するノモスそれ自体の虚構性や、地理的・社会的差異を脱色する貨幣の恐るべき無差別性などに触発されてもいたのではないか。

第四節 「対立」証言の検討

これまでに論じてきた周縁的自己意識やノモスを相対化する視点などは、Dの後半生の思想——すなわちキュニズム——を構成する最も重要な契機のひとつでもある。²⁹ここから本稿は、「シノペに生まれ育ったトラペジテス」としての来歴が、彼の後半生を特徴づける〈犬〉的実践と対立しているわけではなく、むしろその重要な背景を成すものであったという仮説を提起したい。³⁰その意味でDは、〈人〉から〈犬〉へと劇的な大転回を遂げたのではなく、生来すでに〈子犬〉であったと見なすべきなのである。³¹

とはいえ他方、従来の先行研究がDの前半生を後半生の哲学実践と鋭く対立させてきたのも故なきことではなかった。むしろそうした理解は、古代の証言群によって強く裏づけられているようにさえ見える。とりわけ問題となる資料は、たとえば次の四例である。³²

かつて通貨を鑿刻した件で非難されたさい、彼「『D』は次のように語った。「俺にはかつて、今のお前のような奴である時期があった。しかし今の俺のような者に、お前は決してなれないだろう」。また、同じ件で「彼を」非難してきた別の者に対しては「次のように述べた」。「だって、『当時の俺は』すぐに小便を漏らしていたが、今はそうでないのだからね」(Diog. Laert. VI 56 = SSR VB4)。

亡命することは、幾足かの人々をたちまち全面的に裨益した。たとえばDのように。彼は自国から亡命して哲学者となり、シノペに居を構えるのと引き換えにギリシアで過したのである (Muson. IX ap. Stob. Flor.

III 40, 9 = SSR VB13)。

また、追放の件で彼を非難した者に対し、彼「D」は応えた。「だが、とにかくそのことのために、俺は哲学をする運びとなったのだ、哀れな奴め」(Diog. Laert. VI 49 = SSR VBI3)。

Dは追放されたが、「これも悪くはない」のであった。というのも彼は、追放ののち、哲学の営みを始めることになったのだから (Plut. *De tranquill. anim.* VI 467c = SSR VBI4)。

以上の証言群が異口同音に伝えるのは、通貨鑿刻事件とそれにとまなう国外追放(あるいは亡命)とが、Dの哲学実践を始動させる決定的な転機になったのだという次第である。こうした報告に従うかぎり、国外追放以前のDは、いまだキュニコスの意味での「哲学者」(犬)ではなかったと言わねばならない。前半生のDと後半生のDとのあいだには、古来、無視することのできない懸隔が認められていた。

よく指摘されるとおり、この種の間接証言が真実を反映したものである保証はない。とはいえ今回の場合、上でパラフレーズした程度の内容を後代の虚構だと見なすのは、あまりにも過剰な懷疑論である。通貨鑿刻事件とそれに続く亡命体験とがDに〈犬〉の生を歩ませる一大転機となったこと自体は、ほとんど動かしようのない事実であろう。ごく単純に考えて、祖国からの放逐は生活環境の激変を意味し、心身両面に対する負荷を飛躍的に増大させたはずである。通貨鑿刻事件なくして、「哲学者」Dへの覚醒はありえなかった。ひとまずこの点だけは、確かに承認されなければならないと思われる。

しかるにここから、Dの前半生が後半生と「対立」するものであったという旧来の結論は直ちに導かれてこない。通貨鑿刻事件をきっかけとした一連の騒動がDの思想・実践に重大な展開をもたらしたことが事実だとしても、彼の根本的な志向それ自体はなお一貫して同様のものでありうる。本稿が強調したいのは、こうした質的な

意味での連続性である。すなわち本稿は、Dの前半生における諸契機（たとえば周縁的自己意識）が、あくまでもキュニズムの萌芽形で、しかないことを認めはする。そのかぎりでは事件以前のDは、確かに「今のお前のような奴（ταυτὸς ὁ τοιος οὗ νῦν）」——周縁的な自己意識を有し、ノモスを相対化する視点をいくらか持ち、えているとはいえ、実践面では「お前」と同じく依然としてポリスの常識に浸った存在——であった。他方で同時に本稿は、それがほかならぬ萌芽形であることを認めもする。前二節で論じた諸契機は、通貨鑿刻事件という一大転機を経る過程で完全に淘汰されてしまったのではない。むしろそれらは、キュニズムが結晶するための核として決定的な役割を演じ、以後もDの哲学を絶えず根柢から規定しつづけたのである。上で引いた最初の証言のなかで、Dは次のような返答をおこなっていた。「今の俺のような者に、お前は決してなれないだろう」。なぜ「決してなれない」のか。思うにそれは、対話相手——明言はないが、アテナイやコリントスの一般市民を想定するのが自然だろう——が萌芽的にすら〈犬〉ではなかったからでないか。

ともあれいずれにせよ、Dが「ノミスマを鑿刻する」という標語を採用した事実は、第三節の末尾でも触れたように、通常考えられているよりも直截的な仕方であって受けとめられなければならない。山川が詳細に論じる（2007: 110-20）とおり、鑿刻（παράχραξις）それ自体は貨幣の品質管理をおこなううえで別段法外な措置ではなかったように思われる。貨幣の鑿刻はおそらく、贋造や毀損などの明白な違法行為とは異なり、トラペジテスの平常業務の一環であった。それゆえ、「ノミスマを鑿刻する」というキュニズムの基本綱領は、Dがみずからの前半生を後半生と連続的に捉えていたことを示す有力な間接証拠のひとつだと言ってよい。少なくとも彼は、トラペジテスとしての来歴やそれに付いてまわる故国シノペの記憶を、沈黙のうちに抹消しようとしたわけではなかったのである。

補論 A デイオゲネスの生没年

Dの生年に関する直接的な証拠としてはビザンツ時代の百科事典『スーダ』の報告(SSR VB91, 130)があるものの、問題が多く利用しにくい。ここでは「D」という人物がアテナイ三十人政権の崩壊時、すなわち前四〇三年に生まれたとされるが、同時にそのDは、「あるいはオイノマオス³³ (Ἰνὸνμαχος)」「アテナイ人(Ἀθηναῖος)」「悲劇作家(τραγικός)」などと並記されている。プルタルコス(De aud. VII 41c-d = SSR VB129)は弁論術に関わる議論のなかでメランテイオスによる「Dの悲劇」への批評を紹介しており、このメランテイオスがアリストファネスの喜劇で言及される者と同一人であるならば、前四世紀前半に活躍した「アテナイ人の悲劇作家D」が「シノペの人」とは別に存在していた証拠のひとつになるであろう。³⁵ 加えてそもそも、三十人政権の崩壊というアテナイでの出来事をシノペ人の生年の指標として用いるのは不審である。他方、『スーダ』が問題のDに帰す悲劇作品の一覧は、Diog. Laert. VI 80 (= SSR VB117)などでシノペの人に帰された著作目録とおおむね一致しており、その点では後者との同一視を後押しする。³⁶ とはいえ無論、当の著作目録がシノペの人とアテナイの人とを混同している可能性も完全には否定できない(cf. Sayre 1948: 65, 82)。結局のところ、ここで話題になっているDとは何者で、四〇三年に生まれたと言われているのは誰なのか。確定する決め手を欠く。

他方、没年から生年を逆算するというアプローチも可能である。Dがアレクサンドロス大王と同日に死んだという伝承³⁷が仮に正しければ、彼の没年月日は前三二三年の六月十三日だということになる。月日の情報は信用できないが、没年の一致程度は特に疑う理由がない。³⁸ そしてこの時点で彼は、既に老齢であった(Diog. Laert. VI 79 = SSR VB92)とか、九十歳³⁹ろであった(Diog. Laert. VI 76 = SSR VB90)とか、八十一歳であっ

た (Censorinus, *DN* XIV 2 = *SSR* VB90) とか言われる。いずれにせよ、彼の生年は前五世紀の終盤にまで遡らせるのが妥当であろう。³⁹

一連の考証は、Dとその思想が古典期の伝統に深く根ざしていたことを示唆する。彼が成育したのは、ポリス社会の退潮が決定的となるヘレニズム期よりも前の時代であった。そのため実のところ、キュニシズム成立の背景が伝統的なポリス社会の「荒廃」・「危機」・「自信喪失」にあったのだとする通説は、事実の行き過ぎた誇張を含んでいる。むしろわれわれはそれを、ポリス社会の「爛熟」と言い換えるべきであろう。⁴⁰ギリシアの伝統的な文化圏のもとで育ち、ギリシア的な価値観に身を浸らせた者が、それにもかかわらずギリシア的な規範からの逸脱を自覚するところに、キュニシズムの重要な心理的基盤がある。

補論B 初期キュニコス派一般への拡張

「Dは前半生において既にキュニシズムの萌芽的な方向性を予告していた」という本稿の仮説は、初期キュニコス派の他の思想家たちにもある程度拡張することができる。彼らの来歴をめぐる資料はしばしば絶望的なほど乏しいが、それにもかかわらず、彼らの出自が周縁的なものであったことを示す証拠は多岐にわたる。

はじめに、学説誌上はDの直接の師と見なされるアンティステネスは、トラキア人の母から生まれたのだとそう (T. I, 2A, 3A, 107 Prince)。彼の活動拠点であるキュノサルゲスは、半神半人の英雄ヘラクレスを奉じ、混血市民ノトイに開かれた体育場であった。⁴⁴さらにまた、彼の生家はアテナイの外港ペイライエウスにあり (I 2A Prince)、交易業に従事していた可能性もある。当時のギリシアにおける交易業は多くの場合、外国人や奴隷出身者、下層市民などによって営まれる仕事であった (Mossé 1983)。彼がゴルギアスに弁論術を学んでいた

という伝承 (T. II Prince et al.) が事実だとすれば、高額な授業料の原資は海上交易の利益から捻出されたものであったかもしれない。

その他、Dの弟子と伝えられる者たちについていうと、モニモスはもともと銀行家に仕えた家僕であり (Diog. Laert. VI 82 = SSR VGI) 、ヘゲシアスはDと同郷のシノペ人であって、その綽名「首輪／首枷 (Κολοιός)」は彼がもともと奴隷ないし囚人であったことを示唆する (Diog. Laert. VI 84 = SSR VFI) 。また、アステュパライアの人オネシクリトス⁴⁵はアレクサンドロス大王のインド遠征に操舵手として従軍したことが知られており、下層階級出身の海上交易従事者であった可能性がある (cf. Xen. [Ath. Pol.] I 19-20) 。

クラテスの弟子と伝えられる者たち⁴⁶についていうと、メトロクレスおよびヒッパルキアはマロネアというトラキア大都市の出身であり (Diog. Laert. VI 94, 6 = SSR VL1; II) 、ピオン⁴⁷は解放奴隷の父と娼婦の母とのあいだに生まれた子で、彼自身も奴隷生活を経験したばかりか、オルビアという生地 (黒海北岸) の辺境性も諷刺的となった (Diog. Laert. IV 46-7 = F I Kindstrand) 。そして、後世の文学史に大きな足跡を残すメニッポスは、現在のヨルダンにあたるガダラ⁴⁸出身の解放奴隷で、フェニキア人の血筋だったと伝えられるほか、金貸しとしても活動していた可能性がある (Diog. Laert. VI 99-100) 。

これに対しDの高弟クラテスは、上述の面々とは対照的に、ギリシア本土の大都市テーバイの裕福な土地所有市民の出身であり、自発的な財産放棄によって(犬)となった。しかし彼もまた、周縁的な自己意識と無縁ではない。一伝によると「彼は容姿が醜かったし、運動しているさいは笑われるのが常だった」 (Diog. Laert. VI 91 = SSR VH40) 。加えてユリアヌス曰く、「クラテスは[...] 身体に障碍を負っており、足萎えと背虫とを自嘲していた」 (Or. IX 18, 26-8 = SSR VH17) ⁴⁹。晩年のクラテスは自らを「瘤男／背虫男 (κρυπτός)」と呼んでおり (Diog. Laert. VI 92 = SSR VH75) 、身体的特徴が彼のメルクマールとなりうるほど有名なものであったこと、および、彼自身

がそうした身体的ステイグマの象徴性を自覚していたことを示唆する。ギリシア本土の富家に生まれた彼をキュニコス派とつなぎとめ、その諷刺的・反抗的な実践を駆り立てたのは、おそらく、自らが周縁的な存在でしかありえないという痛切な自意識であった。⁵⁰

かくして、初期キュニコス派の思想家たちには、異様な実践を動機づけるに足るほどの人生史的背景が、いかなる形であれ、常に生々しく控えていたのだと言うことができる。そのかぎりでは、「万人が潜在的には〈犬〉になりうる」という *Moloss* の解釈 (1996) は、不当なほど抽象的だと見なさざるをえないであろう。周縁性を養う人生史的背景を欠いた人々にとって、「生き方 (*ἐντοναρις βίον*)」や「習慣 (*habitus et consuetudo*)」としてのキュニシズム (Diog. Laert. VI 103; August. *De civ. D. XIX 1*) は、終生疎遠なものでありつづける。キュニシズムを理解しそれに共感することは、キュニシズムを生きることと同一ではない。法慣習一般の虚構性を理屈のうえで了解することは容易いが、そこから実際に自由になって生きることが驚くほど困難である。こうした巨大な懸隔をまたぐために必要なものの一例が、たとえば初期キュニコス派においてそうであったように、自己の周縁的実存と向き合ってきた格闘の歴史であった。

もとより、キュニコス派が当代の知的伝統の狭隘さに対する痛烈な批判者であった以上、その立脚点は、狭義の哲学的領域の外部にも探し求められなければならない。その意味で、上述したような人生史的観点は、キュニシズムをより広範な社会的・文化的コンテクストのうちに位置づけ、多面的に再構成してゆくにあたっての重要な手がかりとなるであろう。

補論C アンティステネス問題

前半生のDが既にある程度周縁的な見地に立ちえていたという想定は、彼とアンティステネスとの関わりを考えるうえでも非常に重要である。年代考証上、シノペから亡命した(前三四九／八年ごろ?)⁵¹あとにDがアンティステネスに師事したと考えるのは難しい。というのもアンティステネスは、当時すでに故人となっていた見込みが高いからである。⁵²そのためDutley以来の先行研究は、多くの場合、両者の直接的な師弟関係を否定してきた。⁵³

とはいえ、亡命以前の段階ですでにDがキユニシズムの萌芽的思想を持ちえていたのだとすれば、市民時代の彼がアテナイ留学のタイミングでアンティステネスに直接師事したと考えることも十分可能(論理的にのみならず内容的にも)である。⁵⁴この点に関連する資料として興味深いのは、前三六二年の段階ですでにDは「知られていた(*ἐγνωρίετο*)」とする年代記の報告である(*Chron. Pasch.* a. 362 = SSR VB2)。言うまでもなく本稿の議論は、Dとアンティステネスの直接的な師弟関係を「証明」するものではないが、他方で、その可能性が完全には否定されえないということを示唆するものではある。⁵⁵

文献表

- ・外国語文献からの引用は断りがないかぎり拙訳である。個別の校訂本を挙げていない一次資料についてはSSRを底本とした。
- ・訳文中の四角括弧「」は引用者による補いなし言い換えを指す。

・古典テキストや現代の雑誌・資料集等の略称は原則として *Oxford Classical Dictionary*, 4th ed. 及び *L'Année Philologique* に準拠し、同書（誌）が略称を示していない文献については慣例の表記を踏襲した。

【テキストと翻訳】

- T. Dorandi (ed.), 2013, *Diogenes Laertius: Lives of Eminent Philosophers*, Cambridge University Press.
G. Giannantoni (ed.), 1990, *Socratis et Socraticorum Reliquiae*, 4 vols., Bibliopolis. [= SSR]
J. F. Kindstrand (ed.), 1976, *Bion of Borysthenes: A Collection of the Fragments with Introduction and Commentary*, Uppsala.
松平千秋（訳）『クロネウス：歴史』改版『全三巻』岩波文庫。
S. Prince (ed. & tr.), 2015, *Antisthenes of Athens: Texts, Translations, and Commentary*, University of Michigan Press.
F. Susenhihl (ed.), 1880, *Aristotelis Ethica Nicomachea*, Teubner.

【二次文献・その他】

- S. n., 1930, 'Third Meeting,' in *PCPhS* 142, pp. 5-7.
F. G. Allinson (ed. & tr.), 1921, *Menander: The Principal Fragments*, William Heinemann.
R. Bogaert, 1968, *Banques et Banquiers dans les Cité Grecques*, A. W. Sijthoff.
R. B. Branham & M.-O. Goulet-Cazé (eds.), 1996, *The Cynics: The Cynic Movement in Antiquity and its Legacy*, University of California Press.
[= *CMAI*]
D. Braund, 1997, 'Greeks and Barbarians: The Black Sea Region and Hellenism under the Early Empire,' in S. E. Alcock (ed.), *The Early Roman Empire in the East*, Oxbow Books, pp. 121-136.
D. Braund, 2005, 'Percles, Cleon and the Pontus: The Black Sea in Athens c. 440-421,' in D. Braund (ed.), *Scythians and Greeks: Cultural Interactions*

- in *Scythia, Athens and the Early Roman Empire (Sixth Century BC-First Century AD)*, University of Exeter Press, pp. 80-99, 200-6.
- D. Braund, 2010, 'Myth and Ritual at Sinope: From Diogenes the Cynic to Sampe the Amazon,' in *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia*, 16, pp. 11-23.
- W. D. Desmond, 2006, *The Greek Praise of Poverty: Origins of Ancient Cynicism*, University of Notre Dame Press.
- D. Diderot, 1751, 'Cynique,' in J. Le R. d'Alembert, D. Diderot (eds.), *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, 1st ed., vol. 4, pp. 594-9.
- H. Diels, 1893, 'Aus dem Leben des Cynikers Diogenes,' in *AGPh* 7 (3), pp. 313-6.
- D. R. Dudley, 1937, *A History of Cynicism: From Diogenes to the 6th Century A.D.*, Methuen & Company.
- K. von Fritz, 1926, *Quellenuntersuchungen zu Leben und Philosophie des Diogenes von Sinope*, Dieterich.
- R. Garland, 1995, *The Eye of the Beholder: Deformity and Disability in the Greco-Roman World*, Cornell University Press.
- R. Goulet (ed.), 1989-2018, *Dictionnaire des philosophes antiques*, 7 vols., CNRS. [= *DPhA*]
- R. Goulet, 1994, 'Diocles de Magnésie,' in *DPhA*, vol. 2, pp. 775-7.
- M.-O. Goulet-Cazé, 1996, 'Introduction,' in *CMAL*, pp. 1-27.
- M.-O. Goulet-Cazé, 2000, 'Euboulides,' in *DPhA*, vol. 3, p. 249.
- M.-O. Goulet-Cazé, 2005, 'Onésicrite d'Asypalaea,' in *DPhA*, vol. 4, pp. 776-80.
- M.-O. Goulet-Cazé et al., 1994, 'Diogène de Sinope, surnommé le Chien,' in *DPhA*, vol. 2, pp. 812-23.
- L. Kurke, 1995, 'Herodotus and the Language of Metals,' in *Helios*, 22, pp. 36-64.
- A. A. Long, 1986, *Hellenistic Philosophy: Stoics, Epicureans, Sceptics*, 2nd ed., University of California Press.
- A. A. Long, 1996, 'The Socratic Tradition: Diogenes, Crates, and Hellenistic Ethics,' in *CMAL*, pp. 28-46.
- P. McKechnie, 1989, *Outsiders in the Greek Cities of the Fourth Century B. C.*, Routledge. [岡山宏 (記) '1995' 『都市国家のアウトサイダー：ポリスから古代帝國へ』 『メネルヴァ書房』]
- J. L. Moles, 1996, 'Cynic Cosmopolitanism,' in *CMAL*, pp. 105-20.
- F. Montanari (ed.), 2018, *The Brill Dictionary of Ancient Greek*, 2nd ed., Brill.
- C. Mossé, 1983, 'The World of the Emporion' in the Private Speeches of Demosthenes,' in P. Garnsey, K. Hopkins, C. R. Whitaker (eds.), *Trade in the Ancient Economy*, University of California Press, pp. 53-63.

- P. von der Mühl, 1966, 'Interpretationen biographischer Überlieferung,' in *MH* 23 (4), pp. 234-9.
- R. Müller, 1985, *Les Mégariques: Fragments et Témoignages*, Vrin.
- L. E. Navia, 1996, *Classical Cynicism: A Critical Study*, Greenwood Press.
- O. Overwien, 2005, *Die Sprüche des Kynikers Diogenes in der griechischen und arabischen Überlieferung*, Franz Steiner.
- S. von Reden, 1997, 'Money, Law and Exchange: Coinage in the Greek Polis,' in *JHS* 117, pp. 154-76.
- D. M. Robinson, 1906, 'Ancient Sinope: Second Part,' in *AIPh* 27 (3), pp. 245-79.
- J.-M. Robinneau, 2023, *The Dangerous Life and Ideas of Diogenes the Cynic*, M. DeBevoise (tr.), Oxford University Press.
- F. Sayre, 1948, *The Greek Cynics*, J. H. Furst Company.
- E. Schwartz, 1910, 'Diogenes der Hund und Krates der Kyniker,' in *Charakterköpfe aus der antiken Literatur*, vol. 2, Teubner, pp. 1-23.
- R. Seaford, 2004, *Money and the Early Greek Mind: Homer, Philosophy, Tragedy*, Cambridge University Press.
- 篠崎三男, 2013, 『黒海沿岸の古代ギリシヤ植民地』, 東海大学出版会。
- G. Simmel, 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot. [居安正 (訳), 1994, 『社会学: 社会の諸形式についての研究』, 全三巻, 白水社。]
- G. Simmel, 1930, *Philosophie des Geldes*, 5th ed., Duncker & Humblot. [居安正 (訳), 1999, 『貨幣の哲学』, 新訳版, 白水社。]
- S. C. Skulley, 2006, 'Currency, Trade and Commerce in Plato's "Laws",' in *HPTh* 27 (2), pp. 189-205.
- R. S. Stroud, 1974, 'An Athenian Law on Silver Coinage,' in *Hesperia: The Journal of the American School of Classical Studies at Athens*, 43 (2), pp. 157-88.
- 杉本陽奈子, 2021, 『古典期アテナイにおける商業活動と職業イメージ』, 南川高志・井上文則 (編), 『生き方と感情の歴史学: 古代ギリシア・ローマ世界の深層を求め』, 山川出版社, pp. 65-84。
- M. D. Usher, 2009, 'Diogenes' Dogeared: Chreia and Quotation in Cynic Performance,' in *CJ* 104 (3), pp. 207-23.
- R. M. Wenley, 1911, 'Cynics,' in *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, vol. 4, Charles Scribner's Sons, pp. 378-83.
- 山川偉也, 2007, 『シノペ: 通貨変造事件』, 『国際文化論集』, 96, pp. 77-144。
- 山川偉也, 2008, 『哲学者ディオゲネス: 世界市民の原像』, 講談社学術文庫。

註

- 1 Cf. Overwien 2005: 301, 'Es wird die Verwandlung eines geldgierigen Finanzhais in einen genügsamen Kyniker-Weisen geschildert'; 山川 2008: 112-3 「Dの「ノモス」から「フュシス」へのコペルニクスの転回」。
- 2 この訳語はひとまず慣例を踏襲した便宜的なものにすぎない。第三節参照。
- 3 属格形 *Ikēōiōu* のみが伝承される。あるいは「ヒケシアス」。
- 4 Cf. Goulet 1994. マグネシアの人で Diog. Laert. の主要典拠のひとり。活動時期に関してはおおよそ前一世紀を生きたと比定されるが、確証はない。
- 5 Cf. fr. 67 Muller; Goulet-Cazé 2000. 今の者については不詳。Diog. Laert. II 41で引かれる人物と同一かとも疑われるが、確定できない。メガラ派の思想家でエウクレイデスの弟子にあたるミレトス人 (SSR III) との同一視 (cf. Bogaert 1968: 226) は個別研究の立場からは概して否定されている (e. g. Muller 1985: 119)。
それゆえ結局、D 自身の述懐 (とされるもの) を除けば、事件の内実を同時代的に語る断片はひとつもないということになる。
- 6 写本どおりに読む。本書は Diog. Laert. VI 80に引かれたふたつの著作目録のいずれにも採録されているため、真作性が比較的高い。
- 7 言うまでもなく *νόμος* は νόμος の両義性 (慣習／通貨) が問題となっている。
- 8 *παρὰ τοῦ πατρὸς αὐτὸν λαβόντα*. トラペジテスの職を引き継いだとも、通貨を引き取ったとも読める。
- 9 E. g. Diels 1893: 313; Schwartz 1911: 13-4; von Fritz 1926: 19-20. 彼らの見立てによると、通貨鑿刻のエピソードはソクラテスの伝記を模倣したものにすぎない。ここで念頭に置かれているのは、ソクラテスの母に

- よる産婆術とDの父による通貨鑿刻との対応や、神託のエピソードの類似などである。Also cf. von der Mühl 1966: 236ff.
- 10 神託の挿話等に関しては依然として史実性に疑問符がつく。
- 11 管見のかぎり、最も周到で学ぶところの多い再構成案は、考古学的資料の綿密な考証を含んだ山川のそれ (2007: 縮約版として 2008: ch. 3) である。
- 12 シノペからの二次植民は前七世紀後半には既に確認できる (篠崎 2013: 180)。
- 13 現にシノペは前三六〇年代にはペルシア系勢力の影響下に入り、その状態がアレクサンドロスの遠征まで続
く (cf. 山川 2007: 99ff)。
- 14 Eur. *IT* 253 からの引用。
- 15 Cf. Long 1996: 45; 山川 2007: 80-1.
- 16 Cf. *SSR VB pass*; Usher 2009. Dの標的ないし聴衆は、古典期後期の「高度な教養を備えた社会 (the highly cultured society)」であつた (Goulet-Cazé 1996: 2)。
- 17 Dの生没年については補論Aを参照のこと
- 18 παρὰχάραξινとさう業務の内実について cf. 山川 2007: 110-20。
- 19 文献資料のみからこの結論を引き出すことはできないように思われる。第一節で翻訳引用した証言において、
鑄銭業務を直接示唆するのは κιβήνηευας の一語のみであり、それさえもあくまで諸伝のうちのひとつに
すぎない。
- 20 Dの「特権的な社会的背景」を強調する Rouineau の整理 (2023: 12-3) は素朴にすぎると思われる。
- 21 「アテナイ人は金貸しどもを憎む」 (Dem. XXXVII 52; also cf. Mossé 1983: 58-9)。「私が船持ちで商人だとい

う由で告発した人々がいる」(Andoc. I 137)。McKechnieが指摘するとおり、「せいぜい都市人口の一過的な要素を成すにすぎない交易者たちは、共同体において尊敬に値するものだとは見なされず、統合もされないという低い立場に置かれた」(1989: 178 [1995: 218])。一伝によると、悲劇作家の「アイスキュロス^{アイスキュロス}はあらゆる騙しを「行商人的な」と呼んだ」(cf. 322 Radt)。プラトンも『法律』のなかで商業への明らかな不信任を示す(e.g. IV 705a)。アリストテレスはプラトンよりはるかに穏健だが、それでも商業への不信任は健在である(e.g. Pol. VII 1327a)。また、交易の場となるエンポリオンは花柳界とも深く結びついたところであった(McKechnie 1989: 178-9 [1995: 218])。「エンポリオンの世界」は周縁的な性格を帯びており、もっぱら非市民と下層市民が活躍する場であった(Mossé 1983)。

22 Cf. 杉本 2021. ただし杉本が指摘するとおり、この意味での銀行業者に寄せられた社会的な信用は、身分や出自の低さにもかかわらず極めて高いものであった(77)。

23 ¹ Awn 673, Mub 65, §65 Overview. なおアラビア語資料のなかには、Dが父と似ておらず、その点でも彼の出自の正統性が疑われるような逸話が残されている(Overview 2005: 332)。

24 たとえばStroudが発表した紀元前三七五/四年のアテナイの碑文資料によると、この年に、ポリスの正式な打刻が為された銀貨は商人・顧客双方ともに受け取りを拒否してはならないという法が発せられたらしい(1974: 159)。この法の存在は、当時のアテナイ銀貨が名目貨幣化していたことを示唆する。

25 Also cf. *Pherc.* 339 = *SSR* VB126. ² ³ ⁴ ⁵ ⁶ ⁷ ⁸ ⁹ ¹⁰ ¹¹ ¹² ¹³ ¹⁴ ¹⁵ ¹⁶ ¹⁷ ¹⁸ ¹⁹ ²⁰ ²¹ ²² ²³ ²⁴ ²⁵ ²⁶ ²⁷ ²⁸ ²⁹ ³⁰ ³¹ ³² ³³ ³⁴ ³⁵ ³⁶ ³⁷ ³⁸ ³⁹ ⁴⁰ ⁴¹ ⁴² ⁴³ ⁴⁴ ⁴⁵ ⁴⁶ ⁴⁷ ⁴⁸ ⁴⁹ ⁵⁰ ⁵¹ ⁵² ⁵³ ⁵⁴ ⁵⁵ ⁵⁶ ⁵⁷ ⁵⁸ ⁵⁹ ⁶⁰ ⁶¹ ⁶² ⁶³ ⁶⁴ ⁶⁵ ⁶⁶ ⁶⁷ ⁶⁸ ⁶⁹ ⁷⁰ ⁷¹ ⁷² ⁷³ ⁷⁴ ⁷⁵ ⁷⁶ ⁷⁷ ⁷⁸ ⁷⁹ ⁸⁰ ⁸¹ ⁸² ⁸³ ⁸⁴ ⁸⁵ ⁸⁶ ⁸⁷ ⁸⁸ ⁸⁹ ⁹⁰ ⁹¹ ⁹² ⁹³ ⁹⁴ ⁹⁵ ⁹⁶ ⁹⁷ ⁹⁸ ⁹⁹ ¹⁰⁰ ¹⁰¹ ¹⁰² ¹⁰³ ¹⁰⁴ ¹⁰⁵ ¹⁰⁶ ¹⁰⁷ ¹⁰⁸ ¹⁰⁹ ¹¹⁰ ¹¹¹ ¹¹² ¹¹³ ¹¹⁴ ¹¹⁵ ¹¹⁶ ¹¹⁷ ¹¹⁸ ¹¹⁹ ¹²⁰ ¹²¹ ¹²² ¹²³ ¹²⁴ ¹²⁵ ¹²⁶ ¹²⁷ ¹²⁸ ¹²⁹ ¹³⁰ ¹³¹ ¹³² ¹³³ ¹³⁴ ¹³⁵ ¹³⁶ ¹³⁷ ¹³⁸ ¹³⁹ ¹⁴⁰ ¹⁴¹ ¹⁴² ¹⁴³ ¹⁴⁴ ¹⁴⁵ ¹⁴⁶ ¹⁴⁷ ¹⁴⁸ ¹⁴⁹ ¹⁵⁰ ¹⁵¹ ¹⁵² ¹⁵³ ¹⁵⁴ ¹⁵⁵ ¹⁵⁶ ¹⁵⁷ ¹⁵⁸ ¹⁵⁹ ¹⁶⁰ ¹⁶¹ ¹⁶² ¹⁶³ ¹⁶⁴ ¹⁶⁵ ¹⁶⁶ ¹⁶⁷ ¹⁶⁸ ¹⁶⁹ ¹⁷⁰ ¹⁷¹ ¹⁷² ¹⁷³ ¹⁷⁴ ¹⁷⁵ ¹⁷⁶ ¹⁷⁷ ¹⁷⁸ ¹⁷⁹ ¹⁸⁰ ¹⁸¹ ¹⁸² ¹⁸³ ¹⁸⁴ ¹⁸⁵ ¹⁸⁶ ¹⁸⁷ ¹⁸⁸ ¹⁸⁹ ¹⁹⁰ ¹⁹¹ ¹⁹² ¹⁹³ ¹⁹⁴ ¹⁹⁵ ¹⁹⁶ ¹⁹⁷ ¹⁹⁸ ¹⁹⁹ ²⁰⁰ ²⁰¹ ²⁰² ²⁰³ ²⁰⁴ ²⁰⁵ ²⁰⁶ ²⁰⁷ ²⁰⁸ ²⁰⁹ ²¹⁰ ²¹¹ ²¹² ²¹³ ²¹⁴ ²¹⁵ ²¹⁶ ²¹⁷ ²¹⁸ ²¹⁹ ²²⁰ ²²¹ ²²² ²²³ ²²⁴ ²²⁵ ²²⁶ ²²⁷ ²²⁸ ²²⁹ ²³⁰ ²³¹ ²³² ²³³ ²³⁴ ²³⁵ ²³⁶ ²³⁷ ²³⁸ ²³⁹ ²⁴⁰ ²⁴¹ ²⁴² ²⁴³ ²⁴⁴ ²⁴⁵ ²⁴⁶ ²⁴⁷ ²⁴⁸ ²⁴⁹ ²⁵⁰ ²⁵¹ ²⁵² ²⁵³ ²⁵⁴ ²⁵⁵ ²⁵⁶ ²⁵⁷ ²⁵⁸ ²⁵⁹ ²⁶⁰ ²⁶¹ ²⁶² ²⁶³ ²⁶⁴ ²⁶⁵ ²⁶⁶ ²⁶⁷ ²⁶⁸ ²⁶⁹ ²⁷⁰ ²⁷¹ ²⁷² ²⁷³ ²⁷⁴ ²⁷⁵ ²⁷⁶ ²⁷⁷ ²⁷⁸ ²⁷⁹ ²⁸⁰ ²⁸¹ ²⁸² ²⁸³ ²⁸⁴ ²⁸⁵ ²⁸⁶ ²⁸⁷ ²⁸⁸ ²⁸⁹ ²⁹⁰ ²⁹¹ ²⁹² ²⁹³ ²⁹⁴ ²⁹⁵ ²⁹⁶ ²⁹⁷ ²⁹⁸ ²⁹⁹ ³⁰⁰ ³⁰¹ ³⁰² ³⁰³ ³⁰⁴ ³⁰⁵ ³⁰⁶ ³⁰⁷ ³⁰⁸ ³⁰⁹ ³¹⁰ ³¹¹ ³¹² ³¹³ ³¹⁴ ³¹⁵ ³¹⁶ ³¹⁷ ³¹⁸ ³¹⁹ ³²⁰ ³²¹ ³²² ³²³ ³²⁴ ³²⁵ ³²⁶ ³²⁷ ³²⁸ ³²⁹ ³³⁰ ³³¹ ³³² ³³³ ³³⁴ ³³⁵ ³³⁶ ³³⁷ ³³⁸ ³³⁹ ³⁴⁰ ³⁴¹ ³⁴² ³⁴³ ³⁴⁴ ³⁴⁵ ³⁴⁶ ³⁴⁷ ³⁴⁸ ³⁴⁹ ³⁵⁰ ³⁵¹ ³⁵² ³⁵³ ³⁵⁴ ³⁵⁵ ³⁵⁶ ³⁵⁷ ³⁵⁸ ³⁵⁹ ³⁶⁰ ³⁶¹ ³⁶² ³⁶³ ³⁶⁴ ³⁶⁵ ³⁶⁶ ³⁶⁷ ³⁶⁸ ³⁶⁹ ³⁷⁰ ³⁷¹ ³⁷² ³⁷³ ³⁷⁴ ³⁷⁵ ³⁷⁶ ³⁷⁷ ³⁷⁸ ³⁷⁹ ³⁸⁰ ³⁸¹ ³⁸² ³⁸³ ³⁸⁴ ³⁸⁵ ³⁸⁶ ³⁸⁷ ³⁸⁸ ³⁸⁹ ³⁹⁰ ³⁹¹ ³⁹² ³⁹³ ³⁹⁴ ³⁹⁵ ³⁹⁶ ³⁹⁷ ³⁹⁸ ³⁹⁹ ⁴⁰⁰ ⁴⁰¹ ⁴⁰² ⁴⁰³ ⁴⁰⁴ ⁴⁰⁵ ⁴⁰⁶ ⁴⁰⁷ ⁴⁰⁸ ⁴⁰⁹ ⁴¹⁰ ⁴¹¹ ⁴¹² ⁴¹³ ⁴¹⁴ ⁴¹⁵ ⁴¹⁶ ⁴¹⁷ ⁴¹⁸ ⁴¹⁹ ⁴²⁰ ⁴²¹ ⁴²² ⁴²³ ⁴²⁴ ⁴²⁵ ⁴²⁶ ⁴²⁷ ⁴²⁸ ⁴²⁹ ⁴³⁰ ⁴³¹ ⁴³² ⁴³³ ⁴³⁴ ⁴³⁵ ⁴³⁶ ⁴³⁷ ⁴³⁸ ⁴³⁹ ⁴⁴⁰ ⁴⁴¹ ⁴⁴² ⁴⁴³ ⁴⁴⁴ ⁴⁴⁵ ⁴⁴⁶ ⁴⁴⁷ ⁴⁴⁸ ⁴⁴⁹ ⁴⁵⁰ ⁴⁵¹ ⁴⁵² ⁴⁵³ ⁴⁵⁴ ⁴⁵⁵ ⁴⁵⁶ ⁴⁵⁷ ⁴⁵⁸ ⁴⁵⁹ ⁴⁶⁰ ⁴⁶¹ ⁴⁶² ⁴⁶³ ⁴⁶⁴ ⁴⁶⁵ ⁴⁶⁶ ⁴⁶⁷ ⁴⁶⁸ ⁴⁶⁹ ⁴⁷⁰ ⁴⁷¹ ⁴⁷² ⁴⁷³ ⁴⁷⁴ ⁴⁷⁵ ⁴⁷⁶ ⁴⁷⁷ ⁴⁷⁸ ⁴⁷⁹ ⁴⁸⁰ ⁴⁸¹ ⁴⁸² ⁴⁸³ ⁴⁸⁴ ⁴⁸⁵ ⁴⁸⁶ ⁴⁸⁷ ⁴⁸⁸ ⁴⁸⁹ ⁴⁹⁰ ⁴⁹¹ ⁴⁹² ⁴⁹³ ⁴⁹⁴ ⁴⁹⁵ ⁴⁹⁶ ⁴⁹⁷ ⁴⁹⁸ ⁴⁹⁹ ⁵⁰⁰ ⁵⁰¹ ⁵⁰² ⁵⁰³ ⁵⁰⁴ ⁵⁰⁵ ⁵⁰⁶ ⁵⁰⁷ ⁵⁰⁸ ⁵⁰⁹ ⁵¹⁰ ⁵¹¹ ⁵¹² ⁵¹³ ⁵¹⁴ ⁵¹⁵ ⁵¹⁶ ⁵¹⁷ ⁵¹⁸ ⁵¹⁹ ⁵²⁰ ⁵²¹ ⁵²² ⁵²³ ⁵²⁴ ⁵²⁵ ⁵²⁶ ⁵²⁷ ⁵²⁸ ⁵²⁹ ⁵³⁰ ⁵³¹ ⁵³² ⁵³³ ⁵³⁴ ⁵³⁵ ⁵³⁶ ⁵³⁷ ⁵³⁸ ⁵³⁹ ⁵⁴⁰ ⁵⁴¹ ⁵⁴² ⁵⁴³ ⁵⁴⁴ ⁵⁴⁵ ⁵⁴⁶ ⁵⁴⁷ ⁵⁴⁸ ⁵⁴⁹ ⁵⁵⁰ ⁵⁵¹ ⁵⁵² ⁵⁵³ ⁵⁵⁴ ⁵⁵⁵ ⁵⁵⁶ ⁵⁵⁷ ⁵⁵⁸ ⁵⁵⁹ ⁵⁶⁰ ⁵⁶¹ ⁵⁶² ⁵⁶³ ⁵⁶⁴ ⁵⁶⁵ ⁵⁶⁶ ⁵⁶⁷ ⁵⁶⁸ ⁵⁶⁹ ⁵⁷⁰ ⁵⁷¹ ⁵⁷² ⁵⁷³ ⁵⁷⁴ ⁵⁷⁵ ⁵⁷⁶ ⁵⁷⁷ ⁵⁷⁸ ⁵⁷⁹ ⁵⁸⁰ ⁵⁸¹ ⁵⁸² ⁵⁸³ ⁵⁸⁴ ⁵⁸⁵ ⁵⁸⁶ ⁵⁸⁷ ⁵⁸⁸ ⁵⁸⁹ ⁵⁹⁰ ⁵⁹¹ ⁵⁹² ⁵⁹³ ⁵⁹⁴ ⁵⁹⁵ ⁵⁹⁶ ⁵⁹⁷ ⁵⁹⁸ ⁵⁹⁹ ⁶⁰⁰ ⁶⁰¹ ⁶⁰² ⁶⁰³ ⁶⁰⁴ ⁶⁰⁵ ⁶⁰⁶ ⁶⁰⁷ ⁶⁰⁸ ⁶⁰⁹ ⁶¹⁰ ⁶¹¹ ⁶¹² ⁶¹³ ⁶¹⁴ ⁶¹⁵ ⁶¹⁶ ⁶¹⁷ ⁶¹⁸ ⁶¹⁹ ⁶²⁰ ⁶²¹ ⁶²² ⁶²³ ⁶²⁴ ⁶²⁵ ⁶²⁶ ⁶²⁷ ⁶²⁸ ⁶²⁹ ⁶³⁰ ⁶³¹ ⁶³² ⁶³³ ⁶³⁴ ⁶³⁵ ⁶³⁶ ⁶³⁷ ⁶³⁸ ⁶³⁹ ⁶⁴⁰ ⁶⁴¹ ⁶⁴² ⁶⁴³ ⁶⁴⁴ ⁶⁴⁵ ⁶⁴⁶ ⁶⁴⁷ ⁶⁴⁸ ⁶⁴⁹ ⁶⁵⁰ ⁶⁵¹ ⁶⁵² ⁶⁵³ ⁶⁵⁴ ⁶⁵⁵ ⁶⁵⁶ ⁶⁵⁷ ⁶⁵⁸ ⁶⁵⁹ ⁶⁶⁰ ⁶⁶¹ ⁶⁶² ⁶⁶³ ⁶⁶⁴ ⁶⁶⁵ ⁶⁶⁶ ⁶⁶⁷ ⁶⁶⁸ ⁶⁶⁹ ⁶⁷⁰ ⁶⁷¹ ⁶⁷² ⁶⁷³ ⁶⁷⁴ ⁶⁷⁵ ⁶⁷⁶ ⁶⁷⁷ ⁶⁷⁸ ⁶⁷⁹ ⁶⁸⁰ ⁶⁸¹ ⁶⁸² ⁶⁸³ ⁶⁸⁴ ⁶⁸⁵ ⁶⁸⁶ ⁶⁸⁷ ⁶⁸⁸ ⁶⁸⁹ ⁶⁹⁰ ⁶⁹¹ ⁶⁹² ⁶⁹³ ⁶⁹⁴ ⁶⁹⁵ ⁶⁹⁶ ⁶⁹⁷ ⁶⁹⁸ ⁶⁹⁹ ⁷⁰⁰ ⁷⁰¹ ⁷⁰² ⁷⁰³ ⁷⁰⁴ ⁷⁰⁵ ⁷⁰⁶ ⁷⁰⁷ ⁷⁰⁸ ⁷⁰⁹ ⁷¹⁰ ⁷¹¹ ⁷¹² ⁷¹³ ⁷¹⁴ ⁷¹⁵ ⁷¹⁶ ⁷¹⁷ ⁷¹⁸ ⁷¹⁹ ⁷²⁰ ⁷²¹ ⁷²² ⁷²³ ⁷²⁴ ⁷²⁵ ⁷²⁶ ⁷²⁷ ⁷²⁸ ⁷²⁹ ⁷³⁰ ⁷³¹ ⁷³² ⁷³³ ⁷³⁴ ⁷³⁵ ⁷³⁶ ⁷³⁷ ⁷³⁸ ⁷³⁹ ⁷⁴⁰ ⁷⁴¹ ⁷⁴² ⁷⁴³ ⁷⁴⁴ ⁷⁴⁵ ⁷⁴⁶ ⁷⁴⁷ ⁷⁴⁸ ⁷⁴⁹ ⁷⁵⁰ ⁷⁵¹ ⁷⁵² ⁷⁵³ ⁷⁵⁴ ⁷⁵⁵ ⁷⁵⁶ ⁷⁵⁷ ⁷⁵⁸ ⁷⁵⁹ ⁷⁶⁰ ⁷⁶¹ ⁷⁶² ⁷⁶³ ⁷⁶⁴ ⁷⁶⁵ ⁷⁶⁶ ⁷⁶⁷ ⁷⁶⁸ ⁷⁶⁹ ⁷⁷⁰ ⁷⁷¹ ⁷⁷² ⁷⁷³ ⁷⁷⁴ ⁷⁷⁵ ⁷⁷⁶ ⁷⁷⁷ ⁷⁷⁸ ⁷⁷⁹ ⁷⁸⁰ ⁷⁸¹ ⁷⁸² ⁷⁸³ ⁷⁸⁴ ⁷⁸⁵ ⁷⁸⁶ ⁷⁸⁷ ⁷⁸⁸ ⁷⁸⁹ ⁷⁹⁰ ⁷⁹¹ ⁷⁹² ⁷⁹³ ⁷⁹⁴ ⁷⁹⁵ ⁷⁹⁶ ⁷⁹⁷ ⁷⁹⁸ ⁷⁹⁹ ⁸⁰⁰ ⁸⁰¹ ⁸⁰² ⁸⁰³ ⁸⁰⁴ ⁸⁰⁵ ⁸⁰⁶ ⁸⁰⁷ ⁸⁰⁸ ⁸⁰⁹ ⁸¹⁰ ⁸¹¹ ⁸¹² ⁸¹³ ⁸¹⁴ ⁸¹⁵ ⁸¹⁶ ⁸¹⁷ ⁸¹⁸ ⁸¹⁹ ⁸²⁰ ⁸²¹ ⁸²² ⁸²³ ⁸²⁴ ⁸²⁵ ⁸²⁶ ⁸²⁷ ⁸²⁸ ⁸²⁹ ⁸³⁰ ⁸³¹ ⁸³² ⁸³³ ⁸³⁴ ⁸³⁵ ⁸³⁶ ⁸³⁷ ⁸³⁸ ⁸³⁹ ⁸⁴⁰ ⁸⁴¹ ⁸⁴² ⁸⁴³ ⁸⁴⁴ ⁸⁴⁵ ⁸⁴⁶ ⁸⁴⁷ ⁸⁴⁸ ⁸⁴⁹ ⁸⁵⁰ ⁸⁵¹ ⁸⁵² ⁸⁵³ ⁸⁵⁴ ⁸⁵⁵ ⁸⁵⁶ ⁸⁵⁷ ⁸⁵⁸ ⁸⁵⁹ ⁸⁶⁰ ⁸⁶¹ ⁸⁶² ⁸⁶³ ⁸⁶⁴ ⁸⁶⁵ ⁸⁶⁶ ⁸⁶⁷ ⁸⁶⁸ ⁸⁶⁹ ⁸⁷⁰ ⁸⁷¹ ⁸⁷² ⁸⁷³ ⁸⁷⁴ ⁸⁷⁵ ⁸⁷⁶ ⁸⁷⁷ ⁸⁷⁸ ⁸⁷⁹ ⁸⁸⁰ ⁸⁸¹ ⁸⁸² ⁸⁸³ ⁸⁸⁴ ⁸⁸⁵ ⁸⁸⁶ ⁸⁸⁷ ⁸⁸⁸ ⁸⁸⁹ ⁸⁹⁰ ⁸⁹¹ ⁸⁹² ⁸⁹³ ⁸⁹⁴ ⁸⁹⁵ ⁸⁹⁶ ⁸⁹⁷ ⁸⁹⁸ ⁸⁹⁹ ⁹⁰⁰ ⁹⁰¹ ⁹⁰² ⁹⁰³ ⁹⁰⁴ ⁹⁰⁵ ⁹⁰⁶ ⁹⁰⁷ ⁹⁰⁸ ⁹⁰⁹ ⁹¹⁰ ⁹¹¹ ⁹¹² ⁹¹³ ⁹¹⁴ ⁹¹⁵ ⁹¹⁶ ⁹¹⁷ ⁹¹⁸ ⁹¹⁹ ⁹²⁰ ⁹²¹ ⁹²² ⁹²³ ⁹²⁴ ⁹²⁵ ⁹²⁶ ⁹²⁷ ⁹²⁸ ⁹²⁹ ⁹³⁰ ⁹³¹ ⁹³² ⁹³³ ⁹³⁴ ⁹³⁵ ⁹³⁶ ⁹³⁷ ⁹³⁸ ⁹³⁹ ⁹⁴⁰ ⁹⁴¹ ⁹⁴² ⁹⁴³ ⁹⁴⁴ ⁹⁴⁵ ⁹⁴⁶ ⁹⁴⁷ ⁹⁴⁸ ⁹⁴⁹ ⁹⁵⁰ ⁹⁵¹ ⁹⁵² ⁹⁵³ ⁹⁵⁴ ⁹⁵⁵ ⁹⁵⁶ ⁹⁵⁷ ⁹⁵⁸ ⁹⁵⁹ ⁹⁶⁰ ⁹⁶¹ ⁹⁶² ⁹⁶³ ⁹⁶⁴ ⁹⁶⁵ ⁹⁶⁶ ⁹⁶⁷ ⁹⁶⁸ ⁹⁶⁹ ⁹⁷⁰ ⁹⁷¹ ⁹⁷² ⁹⁷³ ⁹⁷⁴ ⁹⁷⁵ ⁹⁷⁶ ⁹⁷⁷ ⁹⁷⁸ ⁹⁷⁹ ⁹⁸⁰ ⁹⁸¹ ⁹⁸² ⁹⁸³ ⁹⁸⁴ ⁹⁸⁵ ⁹⁸⁶ ⁹⁸⁷ ⁹⁸⁸ ⁹⁸⁹ ⁹⁹⁰ ⁹⁹¹ ⁹⁹² ⁹⁹³ ⁹⁹⁴ ⁹⁹⁵ ⁹⁹⁶ ⁹⁹⁷ ⁹⁹⁸ ⁹⁹⁹ ¹⁰⁰⁰ ¹⁰⁰¹ ¹⁰⁰² ¹⁰⁰³ ¹⁰⁰⁴ ¹⁰⁰⁵ ¹⁰⁰⁶ ¹⁰⁰⁷ ¹⁰⁰⁸ ¹⁰⁰⁹ ¹⁰¹⁰ ¹⁰¹¹ ¹⁰¹² ¹⁰¹³ ¹⁰¹⁴ ¹⁰¹⁵ ¹⁰¹⁶ ¹⁰¹⁷ ¹⁰¹⁸ ¹⁰¹⁹ ¹⁰²⁰ ¹⁰²¹ ¹⁰²² ¹⁰²³ ¹⁰²⁴ ¹⁰²⁵ ¹⁰²⁶ ¹⁰²⁷ ¹⁰²⁸ ¹⁰²⁹ ¹⁰³⁰ ¹⁰³¹ ¹⁰³² ¹⁰³³ ¹⁰³⁴ ¹⁰³⁵ ¹⁰³⁶ ¹⁰³⁷ ¹⁰³⁸ ¹⁰³⁹ ¹⁰⁴⁰ ¹⁰⁴¹ ¹⁰⁴² ¹⁰⁴³ ¹⁰⁴⁴ ¹⁰⁴⁵ ¹⁰⁴⁶ ¹⁰⁴⁷ ¹⁰⁴⁸ ¹⁰⁴⁹ ¹⁰⁵⁰ ¹⁰⁵¹ ¹⁰⁵² ¹⁰⁵³ ¹⁰⁵⁴ ¹⁰⁵⁵ ¹⁰⁵⁶ ¹⁰⁵⁷ ¹⁰⁵⁸ ¹⁰⁵⁹ ¹⁰⁶⁰ ¹⁰⁶¹ ¹⁰⁶² ¹⁰⁶³ ¹⁰⁶⁴ ¹⁰⁶⁵ ¹⁰⁶⁶ ¹⁰⁶⁷ ¹⁰⁶⁸ ¹⁰⁶⁹ ¹⁰⁷⁰ ¹⁰⁷¹ ¹⁰⁷² ¹⁰⁷³ ¹⁰⁷⁴ ¹⁰⁷⁵ ¹⁰⁷⁶ ¹⁰⁷⁷ ¹⁰⁷⁸ ¹⁰⁷⁹ ¹⁰⁸⁰ ¹⁰⁸¹ ¹⁰⁸² ¹⁰⁸³ ¹⁰⁸⁴ ¹⁰⁸⁵ ¹⁰⁸⁶ ¹⁰⁸⁷ ¹⁰⁸⁸ ¹⁰⁸⁹ ¹⁰⁹⁰ ¹⁰⁹¹ ¹⁰⁹² ¹⁰⁹³ ¹⁰⁹⁴ ¹⁰⁹⁵ ¹⁰⁹⁶ ¹⁰⁹⁷ ¹⁰⁹⁸ ¹⁰⁹⁹ ¹¹⁰⁰ ¹¹⁰¹ ¹¹⁰² ¹¹⁰³ ¹¹⁰⁴ ¹¹⁰⁵ ¹¹⁰⁶ ¹¹⁰⁷ ¹¹⁰⁸ ¹¹⁰⁹ ¹¹¹⁰ ¹¹¹¹ ¹¹¹² ¹¹¹³ ¹¹¹⁴ ¹¹¹⁵ ¹¹¹⁶ ¹¹¹⁷ ¹¹¹⁸ ¹¹¹⁹ ¹¹²⁰ ¹¹²¹ ¹¹²² ¹¹²³ ¹¹²⁴ ¹¹²⁵ ¹¹²⁶ ¹¹²⁷ ¹¹²⁸ ¹¹²⁹ ¹¹³⁰ ¹¹³¹ ¹¹³² ¹¹³³ ¹¹³⁴ ¹¹³⁵ ¹¹³⁶ ¹¹³⁷ ¹¹³⁸ ¹¹³⁹ ¹¹⁴⁰ ¹¹⁴¹ ¹¹⁴² ¹¹⁴³ ¹¹⁴⁴ ¹¹⁴⁵ ¹¹⁴⁶ ¹¹⁴⁷ ¹¹⁴⁸ ¹¹⁴⁹ ¹¹⁵⁰ ¹¹⁵¹ ¹¹⁵² ¹¹⁵³ ¹¹⁵⁴ ¹¹⁵⁵ ¹¹⁵⁶ ¹¹⁵⁷ ¹¹⁵⁸ ¹¹⁵⁹ ¹¹⁶⁰ ¹¹⁶¹ ¹¹⁶² ¹¹⁶³ ¹¹⁶⁴ ¹¹⁶⁵ ¹¹⁶⁶ ¹¹⁶⁷ ¹¹⁶⁸ ¹¹⁶⁹ ¹¹⁷⁰ ¹¹⁷¹ ¹¹⁷² ¹¹⁷³ ¹¹⁷⁴ ¹¹⁷⁵ ¹¹⁷⁶ ¹¹⁷⁷ ¹¹⁷⁸ ¹¹⁷⁹ ¹¹⁸⁰ ¹¹⁸¹ ¹¹⁸² ¹¹⁸³ ¹¹⁸⁴ ¹¹⁸⁵ ¹¹⁸⁶ ¹¹⁸⁷ ¹¹⁸⁸ ¹¹⁸⁹ ¹¹⁹⁰ ¹¹⁹¹ ¹¹⁹² ¹¹⁹³ ¹¹⁹⁴ ¹¹⁹⁵ ¹¹⁹⁶ ¹¹⁹⁷ ¹¹⁹⁸ ¹¹⁹⁹ ¹²⁰⁰ ¹²⁰¹ ¹²⁰² ¹²⁰³ ¹²⁰⁴ ¹²⁰⁵ ¹²⁰⁶ ¹²⁰⁷ ¹²⁰⁸ ¹²⁰⁹ ¹²¹⁰ ¹²¹¹ ¹²¹² ¹²¹³ ¹²¹⁴ ¹²¹⁵ ¹²¹⁶ ¹²¹⁷ ¹²¹⁸ ¹²¹⁹ ¹²²⁰ ¹²²¹ ¹²²² ¹²²³ ¹²²⁴ ¹²²⁵ ¹²²⁶ ¹²²⁷ ¹²²⁸ ¹²²⁹ ¹²³⁰ ¹²³¹ ¹²³² ¹²³³ ¹²³⁴ ¹²³⁵ ¹²³⁶ ¹²³⁷ ¹²³⁸ ¹²³⁹ ¹²⁴⁰ ¹²⁴¹ ¹²⁴² ¹²⁴³ ¹²⁴⁴ ¹²⁴⁵ ¹²⁴⁶ ¹²⁴⁷ ¹²⁴⁸ ¹²⁴⁹ ¹²⁵⁰ ¹²⁵¹ ¹²⁵² ¹²⁵³ ¹²⁵⁴ ¹²⁵⁵ ¹²⁵⁶ ¹²⁵⁷ ¹²⁵⁸ ¹²⁵⁹ ¹²⁶⁰ ¹²⁶¹ ¹²⁶² ¹²⁶³ ¹²⁶⁴ ¹²⁶⁵ ¹²⁶⁶ ¹²⁶⁷ ¹²⁶⁸ ¹²⁶⁹ ¹²⁷⁰ ¹²⁷¹ ¹²⁷² ¹²⁷³ ¹²⁷⁴ ¹²⁷⁵ ¹²⁷⁶ ¹²⁷⁷ ¹²⁷⁸ ¹²⁷⁹ ¹²⁸⁰ ¹

市場価値相対主義 (Simmel のいう「シニシズム」) から区別される重要な相違点である。とはいえ後にルキアノスは、哲学者たちを躊躇うことなく競売にかけた (*Vit. auct.*)。

Cf. Seaford 2004: ch. 8. ひとつした普遍性ないし「コスモポリス」性は、プラトンが『法律』のなかで恐れたことのひとつであった (V 742a-c; also cf. Skulley 2006: 202ff)。

Simmel は貨幣文化の「シニシズム」(Zynismus, Simmel はキュニシズムのこととも der antike Zynismus と呼んでおり、現代ドイツで一般的な Zynismus と Kynismus の書き分けを行っていない) について先駆的な指摘を行っている (1930: 263-4 [1999: 267-8])。彼の整理によれば、古今のシニシズムを分かつののは、「積極的に理想的な道徳上の究極目的」の有無でしかない。[「:」シニシズムの培養地は大きな取引の、とりわけ取引所取引の場所であり、そこでは貨幣が多量に存在し、たやすく所有者を変える。そこで貨幣そのものが唯一の利害の中心となればなるほど、また尊敬と確信、才能と徳、美と魂の救済とが貨幣にたいして賭けられるのを見ることが多ければ多いほど、それだけいつそう嘲笑的で軽薄な情趣がこれらのより高い生活財「『尊敬と確信その他』」に対して成立し、これらの生活財は週市の財と同じように同じ価値の痛み (Wertqual) で売られ、こうして結局はまた「市場価値」を受け取る。[「:」本質的にはそれに固有なカテゴリーと理想以外のいっさいの評価を拒否する価値にとつて、この市場価値という概念は、シニシズムが主観的な反応において示すものの完全な客観化にはかならない」(居安正訳、一部改変)。Simmel 自身は D の家業に一切触れていないが、それでも彼の議論は、本稿の立場にとって多くの示唆を含んでいる。

この点については、本稿と決定的に対立する観点を含んではいるものの、山川の議論が啓発的である (2008: ch. 5)。

この仮説に近いものとして、たとえば、キュニシズムにおける先天的気性の重要性を指摘した Zavaia の議論

- がある (1996: 47-8)。しかしながら彼は、Dの思想的来歴を再構成する段に入ると、通貨鑿刻事件前後の単純な対比に終始してしまっている (esp. 87ff)。
- 31 同様の事情は初期キュニコス派の他の構成員たちの多くについても指摘することができる (e. g. cf. Overvieu 2005: 300-2)。詳細は補論Bを参照のこと。
- 32 これは網羅的な枚挙ではない。ただし、現存資料から読み取れる主要な論点は、以下の四例のうちにすべて出揃っている。
- 33 Cf. Julian. *Or.* VII 8, 211d-212a = SSR VB128.
- 34 *Pax* 803-4, 1009; *Av.* 151. これらの喜劇の上演年代はそれぞれ前四二二年、四一四年とされる。Cf. *TrGF* 23.
- 35 Cf. *TrGF* 45. シノペの人Dによる悲劇執筆 (*TrGF* 231) はアテナイ行以後の前四世紀後半にまで下る見込みが高い。とはいえ補論Cをも参照のこと。
- 36 一致していないのは『セメレ』一篇のみ。これについては Diog. Laert. 当該箇所に記載がなく、独立の断片が現存する (*Ath.* XIV 636a)。アテナイのDに帰されるべき作品の混入か。
- 37 Diog. Laert. VI 79; Plut. *Quaest. conv.* VIII 1, 1 = SSR VB92.
- 38 ただし、Dがオリュンピア競技会への見物に向かう途上で死んだとする伝承 (SSR VB99) に従うならば、前三二四年のほうが適切である。
- 39 Goulet-Cazé et al. は前四二二〜〇三年としている (1994)。ともあれDは、四二七年生のプラトンと三八四／三年生のアリストテレスの中間、四一〇〜〇八年生のスペウシポスと概ね同じ世代に属していたということになる (各人の生年については *DPH4* を参照)。
- 40 Wenley 1911: 378-80; Sayre 1948: 49; Goulet-Cazé 1996: 5 et al.

- 41 Cf. Long 1986: 3-4; Desmond 2006: *pass.* esp. 7-9.
- 42 補論Cを参照のこと
- 43 別伝ではフリュギア人 (T 2B, 2C Prince)。
- 44 Hdt. V 63; Dem. XXIII 213; Ath. VI 234c; Plut. *Vit. Them.* 1.2; Paus. I 19.3 et al.
- 45 Diog. Laert. VI 75-6 (= SSR VB137) で登場するアイギナオネシクリトスとは別人だと見なすのが主流と
なっている。Cf. Goulet-Cazé 2005: 776-8.
- 46 ビオンの師がキュニコス派のクラテスであったと明言する資料は現存しない (Diog. Laert. IV 51で名前が挙
がっている「クラテス」は明らかにアカデメイア派のクラテスである)。とはいえ年代上、そのように想定
するのが妥当である (cf. Kindstrand 1976: 10-1)。
- 47 彼は Diog. Laert. IV (アカデメイア派) に伝が収められた折衷的な思想家であるが、とりわけキュニコス派
からの影響が色濃く (Dudley 1937: 62-9; Kindstrand 1976: *pass.*)。
- 48 別伝ではシノペ。Cf. Diog. Laert. VI 95; Robinson 1906: 259-60, 275-6.
- 49 Also cf. *Gnom. lat.* 199 = SSR V B 460. 上述のモニモスもメナンドロスの喜劇断片 (Diog. Laert. VI 83 =
fr. 193 Kassel-Austin) のなかで「三つの頭陀袋を携えている」と描写されており、これは彼の背虫を頭陀袋
に見立てた揶揄だと推測する論者もある (Allinson 1921: 367, n. 2)。
- 50 身体障碍は古代ギリシアにおいて、バルバロイであることにも匹敵するきわめて深刻な被差別属性であった
(cf. Garland 1995)。古代の観相学的発想のもとでは、身体の歪みが精神の歪みの反映と見なされ (cf. Arist.
[*Phys.*] 1) 身体の均整が規範的な意味合いを帯びる。
- 51 Cf. 山川 2007: 98. ただしつれば、Arist. *Rh.* の論争的な年代同定に基づく推定である。

52 Princeはいくつかの証拠から、アンティステネスの生没年を前四四五―三六〇年ごろだと推測する (2015: introduction; also cf. Giannantoni 1990: vol. 4, 199-201)。

53 E. g. Dudley 1937: 1-23; Sayre 1948: 84-96; Giannantoni 1990: vol. 4, 222-6; Goulet-Cazé 1996: 4-5; 山川 2008: 1148. ただし他方で、著作などを介した間接的な影響関係は、依然として多くの論者たちから承認されている (e. g. Dudley 1937: 27; Goulet-Cazé 1996: 7; Long 1996: 32; Roubineau 2023: 83)。

54 この可能性はLongによって既に指摘されているが、彼自身は自らの着想に懐疑的である (1996: 45)。

55 本稿はJSPS科研費 (課題番号: 23K10717) の助成を受けた研究成果の一部である。論文の原型となる草稿について、いくつかの重要な不備を指摘してくださった哲学研究室の納富信留先生に、心より御礼申し上げます。